

ラパスの便り

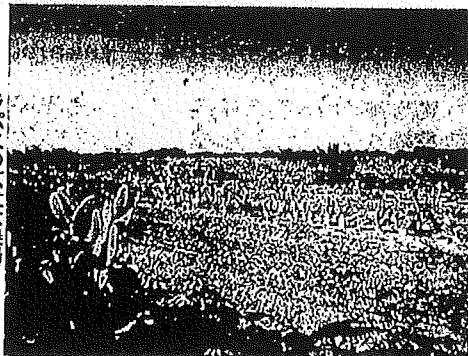
鳥取大学農学部 中島健輔

~6~
日本

調査の方法を学ぶこと
が目的だが、乾燥地
の土壌を調査すること
で、水資源の制約下、
最適な農業の方法を考
え、基礎データも提供
することができた。こ
の成果が少しでも、現
地の農業に役立ってく
ればと願っている。

「土を喰ふ、日々々の体験から四季折々の
が精進十二ヶ月」。水野菜の最も適した食べ
上廻の作品である。彼方を「土を喰ふ」と題
は幼少のころ、禅寺に して著した。
預けられた。この作品 普段、私たちは、土
にはそのときの体験が との関係を意識せず
に つづられている。質素 生活しているが、人間
な寺の生活で、来客の の生命を維持していく
折、もてなす食材がな 上で、農作物の供給源
かったとき、住職は水 として、この関係は切
上に「畑へおもむき、 り離せない。この再考
畷ねよ」と言ったそう も兼ね十月下旬から十
だ。

これは自然に存在す 燥地の土壌調査と診
る食材の露を表現して 断」実習でメキシコの
いる。水上はこのとき 土壌に接した。



ラパスの広大な農場

土は自然の恵みであ
り豊稔の大地は豊か
な生命の源でもある。
そして、それは、われ
われの命を維持する農
作物を提供してくれ
る。

一方で生活の利便性
のためにアスファルト
化される大地、その結
果としての地球温暖化
などの環境破壊が進行
しているといわれている。
実習を通して、環
境問題と土の恵みの尊
さを考えさせられた。

環境問題と土の恵みの尊さ

(鳥取大学農学部 三
年・中島健輔)